



TITLE:

宋元時代の濱海田開発について

AUTHOR(S):

本田, 治

---

CITATION:

本田, 治. 宋元時代の濱海田開発について. 東洋史研究 1982, 40(4): 654-679

ISSUE DATE:

1982-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153843>

RIGHT:

# 宋元時代の濱海田開發について

本 田 治

はじめに

一 濱海新田の名稱と分布

二 濱海新田の構造

三 濱海新田の水利事情

四 濱海新田の農業——占城稻と二期作——

むすび

は じ め に

唐宋の間の江南における低湿地利用の擴大は、江南開發史上のみならず中國農業史上畫期的なことであつた。特に圍田、圩田等に代表される新しいタイプの水利田の造成とその普及は、中國農業の新たな工學的適應段階への到達を示すものであり、水稻品種の改良や肥培管理技術の發達と相俟つて生産力の展開をもたらした。本稿でとりあげる海塗田の如き濱海田も、如上の所謂新田の一つである。しかし、圍田、圩田等に関する豊富な研究蓄積に比べると、濱海新田については專論はもとより、まとまった考察も甚だ乏しいように思われる。<sup>(1)</sup>それは濱海新田と圍田、圩田の如き内陸濱江湖新田との質的、量的落差の反映とも考えられるが、少くとも宋代農業の一側面として正當な反映とは思えない。兩者間には共通項も存するが、淡水と鹹水という一點をとつても、そこから派生する問題には單なる類推が困難なものも存する。以下、

濱海新田造成の具體的事例により、その分布、普及状況を概観し、次いで内陸田との對比を念頭に置きつつ、濱海新田の水利事情、農業等について検討を加えようと思う。また本稿では考察の對象を杭州灣以南の地方に限定した。それは史料の制約もさることながら、先に宋元時代的大海塘（防潮堤）について考察した際、<sup>(2)</sup> おおまかに浙東、浙西、淮南では濱海地利用の形態と海塘の役割に違いが認められたからである。

# 一 濱海新田の名稱と分布

濱海新田を「沙地、沙田」を以て總稱する例もあるが、宋元時代では一名詞を以て一括する使用例はないようである。以下、先ず濱海新田の多様な名稱を挙げ、本稿で扱う範圍を明らかにしておく。現在、この種の新田に對して最も使われる名詞とその解釋は、元の王禎農書卷一一農器圖譜一田制門の塗田である。即ち「塗田、書に云う、『淮海は維れ揚州なり』、『厥の土は塗泥のみ』。大抵水種は皆な塗泥を須う。然らば瀕海の地も復た此等の田法有り。其の潮水の泛ぶる所の沙泥は島嶼に積み、或は盤曲に墊溺し、其の頃畝の多少等しからざるあり。上に鹹草の叢生する有らば、<sup>みちしお</sup>潮の來りて漸く塗泥を惹く有るを候つ。初め水稗を植え、斥鹵既に盡きれば稼田と爲すべし。所謂る『斥鹵を瀉して稻梁を生ず』なり。海岸に沿邊して壁を築き、或は椿櫓を樹立し、以て潮泛を抵ぐ。田邊に溝を開き、以て雨潦を注ぎ、早には則ち灌漑す。之を甜水溝と謂う。其の稼收は常田に比べ、利は十倍ばかり。民多く以て永業と爲す……、今云う、海嶠に塗田を作り、外に潮の來るを拒ぐは古に有る無し。霖潦滲漉して斥鹵盡きれば、<sup>(3)</sup> 秔秠已に豊かなり」とある。次に同書の沙田では「沙田、南方江淮の間の沙淤の田なり。或は大江に濱し、或は中洲に峙む。四圍は蘆葦駢密にして以て堤岸を護る。其の地常に潤澤にして豐熟を保つべし。普く陸埂を爲り、稻秠を種うべし。閒々聚落を爲す。桑麻を藝うべし。或は中に潮溝を貫き、早には則ち頻りに溉ぐ。或は傍に大港を繞らし、澇には則ち水を洩す。所以に水患の憂無し。故に他田に勝る。舊と所謂る坍江の田なり。廢復常ならず。故に畝に常數無く、税に定額無し」とある。この塗田、沙田の解説はそれぞれの特徴を盡し

て略ぼ遺漏がない。両者は沙漲という自然現象を前提とし、構造上、人工の隄岸を以て外水を遮断し且つ沙土の流失を防ぐなど基本的な點で共通している。その相違點は濱江か濱海かという點にある。唯だ沿江の沙田と雖も、河口近くであれば海潮の倒灌の影響下にあり、濱海田の範疇に入る。宋元時代の各種史料中に見える塗田、沙田以外の名稱を列擧すれば、以下の如くである。「海漲塗田」(越中金石志卷十元餘姚州儒學廩田記)、「海沙田」(南宋、樓鑰、攻媿集卷五九餘姚縣海隄記)、「海塗鹹田」(乾道四明圖經卷十普慈禪院新豐莊開塗田記)、「新、舊海塘田」(開慶四明續志卷四廣惠院隱田租總數)、「海塗田」(嘉定赤城志卷二三)、「海田、沙洲田」(淳熙三山志卷一三)、「沿海鹹地」(北宋、蔡襄、端明集卷二六乞復五塘劄子)、「潮田」(南宋、方大琮、鐵菴方公文集卷三三廣州乙巳勸農)、「江漲沙田、退海淤田」(宋會要輯稿一以下宋會要と略す一食貨六一一二紹興六年二月十二日)、「海灘塗地」(同上七一二七熙寧七年四月八日)、「江海畔新出沙田、沙泥田」(同上六一一二紹興二年五月一日)、「沙塗田」(淳祐玉峯志卷中稅賦志官租)などの名稱が見える。海田の如きは比較的廣範圍に分布する外、海字を使った説明的な語がめだつ。『清國行政法』(第一編第五章第一節第四款第三項沙地―開墾)では、江海の沿岸に漲出する地として「沙地、沙坦、沙塗」の名稱が見え、その最も多く分布する地方は江蘇、浙江、廣東三省及び長江沿岸としている。江蘇、浙江二省については、民國二十二年の縣別「沙田」統計<sup>(4)</sup>があり、それによれば、江蘇省(共計八一四萬畝)では丹陽、如皋、灌雲、南通、江寧各縣の順で分布し、浙江省(共計四八八萬九千三百畝)では餘姚、蕭山、杭、臨海、寧海各縣の順で分布していた。最近の海塗墾園(干拓田)面積統計<sup>(5)</sup>によれば、浙江省では、杭、餘杭、海寧、海鹽、平湖、蕭山、紹興、上虞、慈谿、鎮海縣(百萬畝)、鄞、奉化、象山、寧海、三門縣(四五萬畝)、臨海、黃巖、溫嶺縣(三十萬畝)、樂清灣(二八萬畝)、溫、瑞安、平陽縣(二五萬畝)、定海、普陀、岱山(一二萬畝)の各地に共計二四〇萬畝が分布している。

勿論、如上の數字や分布が宋元時代のそれと同じではないが、大勢の類推は可能であろう。當該時代では、この種の統計が殆んど無く零細な史料によって斷片的に知り得るのみである。従つて、以下より多くの事例によつて統計の空白を埋めようと思う。

〔杭州灣南岸〕先に海塘建設を考察した際、その決潰と被害にも言及した。<sup>(6)</sup>例えば、南宋嘉定末年頃、知紹興府であった汪綱の傳に「紹興府」屬邑諸縣は海に瀕す……、瀕海（の地）は塘に藉りて固と爲すも、隄岸は圯れ易く、鹹鹵、稼を害う。歳々損うこと動もすれば數十萬畝、租を蠲くことも亦た萬もて計う……、郡は緡錢三萬を備え、専ら修築に備う。而して海田始めて固し」（宋史列傳一六七）とある。これより先、山陰縣では嘉定四年に海塘が決潰し、民田數十里、斥鹵の地十萬畝が漂没し（宋史五行志）、同六年には海塘の決潰五千丈、斥鹵の地の漸壞する者七萬餘畝に及んだとある（會稽續志卷四）。被災地域の大部分を占める清風、安昌兩郷は現在の南沙（半島部）の附根に當り、塘内に十萬畝に及ぶ斥鹵の地（海田）が存した。東郷の會稽縣東四十里に在る稱浦塘は、唐開元以來修治されてきた防海塘の一部と考えられるが、南宋時には「巫山、威鳳二郷、其の地に適直り、田八百頃爲り。前志『水を蓄め以て灌漑に利す』と謂うも、今、泯然として跡なし。而して海水は田を冒し、獨り民病と爲り、塘の外、尋尺なる能はず」（嘉泰會稽志卷十）とあり、稱浦塘の跡はさだかでなく、兩郷の田八百頃には海水が浸透し、海潮は塘外數尺に迫っていた。既に明らかな如く紹興地方の開發の歴史はかなり古い事、當該地方の海塘は唐開元以來修治が重ねられていた事からして、如上の塘内の被災田は必ずしも、宋時の開墾に係るもののみとは言えないが、宋元時代の多くの潮災記録からして、未だ生産の安定しない濱海田が廣範圍に存した事は確かである。次に餘姚縣では南宋慶元二年に海塘修治財源として海塘莊（倉）が設置されたが、その中には上林郷及び東山郷の海沙田それぞれ二三〇畝、六八三畝が含まれており、海塘修復後「海田倍入に幾し」とある（樓鑰、攻媿集卷五九餘姚縣海隄記）。また、開元、孝義二郷には毎歲亭民が菽麥瓜蔬を種植する海漲塗田二四一畝が贍學田に編入されている（越中金石志卷十、孫元蒙、餘姚州儒學殿田記）。

〔明州〕<sup>(8)</sup>鄞縣翔鳳郷十二都及び十三都には、それぞれ二一二畝三角十二步三尺、一〇〇畝の海塗田が存し、宋以來の州學田であった（兩浙金石志卷一六元慶元路儒學塗田記）。慈谿縣にも贍學海塗田地五九九畝二角三五步が存した（至正四明續志卷七）。定海縣では廣惠院に舊海塘田一〇九〇畝一角、新海塘田二四五畝三十步が存し、それぞれ毎畝三斗、二斗の租を納

めていた（寶慶四明續志卷四廣惠院田租總數）。奉化縣では、兩浙金石志卷九、宋般若會善知識祠記に「（前略）奉化東村に就いて官地海塗を請い、圩して田を爲る。工傭浩博にして、般若會の儲める所を以て之を用う。足らざれば又大慧（禪師）に請い衣鉢もて之を助け、金十萬緡を合す」とあり、宋濂、宋學士文集卷四三芝園前集卷三、四明阿育王山廣利禪寺碑銘に「奉化縣忠義鄉において海塗に隄し、田一千餘畝を成る。般若莊と名づく」と見え淨財十萬緡を以て海塗田千餘畝を造成している。こうした寺院による海塗田造成の例は多く、元、貢師泰、玩齋集卷九、四明慈濟寺碑に「昔は田入の數僅かに二百畝。而るに象山（縣）の塗田又た輒ち水に壞さる。今、幸に堤を成り、亦た已に之に倍す」とあり、兩浙金石志卷九宋故宏智禪師妙光塔銘にも（天童山景德寺僧正）宏智禪師の事績の一つとして「又た濱海の際に即きて隄を築き、其の鹹鹵を障りて之を耕し、以て僧供に給す」とある。天童山景德寺はこの海塗田造成で歲入増益し、四明の甲利と爲るのみならず、東南數千里においても第一に推され、紹熙四年には海莊倍稔し、穀三千斛を贏すに至ったという（樓鑰、攻媿集卷五七天童山千佛閣記）。全島が佛寺といわれる昌國縣では更に盛んで、乾道四明圖經卷十、王存中、普慈禪院新豐莊開請塗田記に「（北宋）大觀中、海塗一段、地名富都鄉白泉壘を請い、歲々穀千斛を得たり。自後、荒蕪して治めず、故を以て常住空闕して毎ごとに食足らざるの嘆あり。一日、頭陀の宗新ら七人有り、道心を開發し、身ら勞役に任じ、其の田を復治す。凡そ三年を歴て而る後に成る。是に於いて石硨三間、圩岸二百丈を建て、畚插、耰鋤の具を備え畢り、歲々大水旱無し」とある。この工事は南宋紹興三十年から三年をかけて行なわれたが、同寺は乾道淳熙の間にも寺僧の手で海塗の干拓を行なっている。同縣蓬萊鄉岱山の超果寺も「（五代）天福の時に當り、主僧惠説有り、高亭西壘に海塗を請い田を爲る。崇寧、政和の間、仲章は馬乳山大壘、谷壘の地に田を復す。上熟に遇うも才かに以て半歳を支すに足るのみ。近ごろ又た寺僧惠興を得て鉢盂を捐し衆を募り、一力經營するに緣り莊成り、卒歳の望を遂ぐ」（大德昌國州圖經卷七寺院）とあり、五代、宋、元と海塗田造成の努力が續けられている。こうした昌國縣における濱海田造成について、寶慶四明續志卷二十紀變に「烏石塘三あり。一は馬秦壘に在り、一は下塘頭千步砂に在り、一は桃花壘に在り。昔は皆な大洋なり。百年の間に或は

砂を卷き以て堤を爲り、或は石を堆めて以て塘を爲り、中は膏腴と成り、人力を以てせず。然らば則ち滄海變じて桑田となるは虚言に非るなり」とあり、干拓田造成における自然の力、沙漲を強調している。しかし、それは前提であって、寺院等による多大の勞力と資金の投下があつて始めて耕地となる事は多くの事例が示す通りである。昌國縣の海塗田造成は寺院によるものばかりではない。開慶四明續志卷一增撥養土田産によれば、養土田に撥入された昌國縣塗田六八〇畝三角二三歩は、もと汪登道なる者の所有に係り、沒官されたものであつた。また元、慶元路儒學々産中の塗田二百畝も沒官以前は「鬻鹽大家」所有のものであつた（兩浙金石志卷一七元慶元路重修儒學記）。學田關係では、翁洲書院田の中にも塗田一五〇畝が見える（大德昌國州圖志卷二）。以上の如き旺盛な濱海田造成は官田中の海塗田面積にも反映しており、二七六八三畝二角六九歩（宋）、四六一九九畝三分（元大德元年）、四九八四六畝八分（大德二年）と増加している。官田土全體が五一三〇八畝餘であつたから、官田の殆んどは海塗田から成つていたことになる（同上書卷二）。

〔台州〕北宋熙寧の頃、台、溫二州九縣の沙塗田一千一百餘頃が新たに根括されている（續資治通鑑長編卷二四八熙寧六年十二月辛卯の條）ことから察せられる如く、濱海地開發が盛んであつた。嘉定赤城志卷一三版籍門一の田土統計によれば、沿海三縣には、臨海縣二四七七一畝三角五二歩、黃巖縣一八二一畝一角一歩、寧海縣六八六畝三角二四歩の海塗田が登籍されていた。台州においても具體的事例では佛寺關係のものが多し。台州金石錄卷十提舉司免納塗田鹽公據によれば、臨海縣鴻祐禪寺は先に承恩鄉貳甲石井岐に塗田を造成し、已に二税を徵せられていたにも拘らず、その上鹽額一二五碩が課せられた爲、提舉司に公據を乞ひ、石に刻んで證據とした。これは鹽田に塗田を造成した珍しい例である。また同上卷五大宋台州臨海縣佛窟山昌國禪院開塗田記によれば、同院は院の北二十里の高湖堰近く塗田を造成している。同記には海塗田造成の過程を述べて、台州は「山を負い海に並う。阪田は陋薄にして下土は塗泥なり。側耕危獲して毫釐を計較す。是を以て富者は阡陌を連ねる無く、中人は皆な尋常を爭う。惟だ海濱の廣斥の地のみ人力を聚め、防を以て止水す。趨ること時に猛獸驚鳥の發する如く、收穫すること寇盜の至るが如し。或は以て大利を得べし。農の此を知る者多

し。之に過ぎる者は其の槍刈耨耨を挟み、威な擊莫疾穰の心有り。幸にして官に請うを得るも、主伯、亞旅、強弱の力、限り有り。比閩、旅黨、郷州の心同じからざれば、則ち人棄て我取り、多くは佛の手に歸す」とある。この文は「近村の農民達が縣司の認可を得ぬまま、我先きに耕作可能な處から種植を始めていたこと……、水利田を開發すべき塗泥地に近村農民の利害が絡んでいたこと」<sup>(10)</sup>を示すものである。また本格的墾園工事以前、圃場改良を施さぬ段階で一種略奪的農業が行なわれていたことをも示している。

〔温州〕南宋、吳詠の鶴林集卷三九温州勸農文によれば、温州地方の濱海平野は元もと塗泥の地で、南宋時には廣く斥けて不耕の田無く、遍く稻麥が植えられていた。州南の平陽縣萬全郷も「相傳うるに海漲の地爲り」(元、蔡芳、平陽萬全海隄記、民國平陽縣志卷七)とある。こうした濱海平野では海潮災害が著しく、宋會要、瑞興三十一、乾道二年十一月六日の條に「旨を被り、温州に前去し存撫、賑恤するに、被水の去處は並な海に沿う。今來、人戸の田畝盡く海水の衝蕩を被り、鹹鹵土脈に浸入し、未だ耕種すべからず。兼ねて今次の水災の後、損失せる人口少からず」とある。平陽縣では、この頃から海塘の整備、私堰私埭の整理、陡門建設など防潮、灌漑施設の再編成が進展している。<sup>(11)</sup>翌三年に建設された縣北萬全郷の沙塘陡門は瑞安縣二郷を含む三郷四千餘頃の田を灌漑する基幹施設であるが、塗田を經營し歲入租穀三百石を以て修治財源に充てていた(乾隆平陽縣志卷八)。また縣南の陰均陡門もそうした基幹施設の一であるが、南宋嘉定元年の築造の際、其の旁の塗地を經營して社倉田としている(南宋、楊簡、慈湖先生遺書卷二永嘉平陽陰均隄記)。具體的な海塗田造成の例としては、南宋、葉適の水心別集卷一六後總、買田數に「竊かに見るに、日前、官員、管下樂清の地名裡江に就いて海塘を築捺す。海塘已に施行する結果には及ばず。今、前項の出剰の所管錢或は官司借撥錢を將て、心力有る郷豪に委ねて專一措置せしめ、築捺成就すれば、仰せて此の一項の穀子もて前項の借請を補填せしめん。築捺し畢るを候ち、委ねし所の人に二分を以て勞を酬い、或は別に推賞を議る……」<sup>(12)</sup>とある。有名な葉適の贍軍買田計畫の一項で、永嘉縣で買上げた贍軍田收入の一部を以て、建設途中の海塗田を竣工せしめんとしたものである。この計畫は別にして、それ以前の官員による



海塘修築は事實である。この例は明らかに塘内に未開發地を残したままの海塘建設である事は確かで、官府による一種の先行投資なのか、自ら塗田造成まで行なわんとしたものか明らかでないが、後者であれば珍しい事例であろう。

〔福州〕福州地方の濱海地開發の歴史は、兩浙、淮南に次いで古い<sup>(13)</sup>。淳熙三山志卷一六版籍類七水利に「唐志、閩縣の東五里に海隄有り。大和三年、令李茸築く。初め毎歲六月、潮水は鹹鹵にして禾苗多く死す。隄成り、溪水を瀦め稻を殖う。其の地三百戸、皆な良田となる（田は五十里の海濱爲り。今、縣東二十里、鹵潮の到らざる所なり、蘊旱にして水竭すれば則ち時として至る。然れども常に爾らず）。長樂十里に海隄有り。大和七年、令李茸築く。十斗門を立て以て潮を禦ぐ。早あれば則ち瀦め、雨ふれば則ち洩す。旁皆な良田と成る」とあるように、閩縣から長樂縣東界に至る石海塘の建設による海潮の遮斷と淡水の瀦蓄を以て、五十里に亙る濱海田が良田となっている。また當時（八二九～三三年）縣東五里に海塘が存したが、その後墾田が進み、南宋時には縣東二十里の地まで海潮が遠のいていた。同上書卷一二版籍類には沙洲田と海田の統計があり、南宋淳熙頃の面積を知ることができる。

沙洲田二百七十一頃九十八畝二角十三步（閩縣一百三十一頃二十畝、侯官縣二頃六十一畝三十四步、懷安縣一百三十頃一十七畝一角二十八步）

海田一千二百三十頃有奇、外長五千六百二十丈（西禪寺蘇溪田一百五頃并園塘三十餘頃。法海綿村田百餘頃、歲入五千斛。靈石百麟洋田遊長萬有一千尺、受種六百斛。黃攀（蘗）鄭渚田堤長三千二百餘尺。香巖上下洋田堤遊九百丈。靈石嶼田周圍三千三百餘丈。寧德赤鑑門等田千餘頃、宣和中流爲海。餘見於後水利陂塘門）

とあり、隄長、面積等の規模を略記している。「餘は後の水利陂塘門に見ゆ」とあり、濱海新田と陂塘等の水利施設とは一體であった事を示している。長樂縣では、瀦防施設の大きなものとしては湖、陂、圳の順で、海に捍（隄）して成る者としては塘、堰があり、百五十餘所も存した（同上書卷一六水利長樂縣）。福清縣の蘇溪陂は北宋天聖二年、西禪寺が萬安、安香二里の地を請い築いたものであり、同縣安香里の靈石白麟洋は涇江の南の金山にあり、高一丈三尺、廣尋餘、長千二

百丈の隄を有し、港大小十一、石斗門を備え、種六百石田に溉したとある。また同縣蘇田里の黃蘗鄭落田は漁浦の南、瀕江の地にあり、唐天寶年間<sup>(14)</sup>に圍墾され、後に廢し北宋天禧元年に寺僧の手で復興されている。その規模は隄長三百二十丈、址廣三丈、高二丈二尺、斗門二十四所であった。先の海田の項に擧げられた例以外では、例えば、東禪塘は北宋開寶中に中山の人劉逢が濱海地數千丈を東禪寺に施捨したもので、高一丈五尺、厚三丈の捍墪、港水三道、泥門十五、斗門を備えていた（以上、同上書卷一六水利）。また長溪縣の營田洋は、唐末に赤岸里居民が斥鹵の地千餘畝を拓いたもので、其の名は閩が吳越との構兵の際に其の地を取って軍費を賄った故事に因る（乾隆福寧府志卷三六霞浦古蹟）。ただ同地の灌漑施設たる營田陂は北宋開寶年間に著作郎王文昉により創築され、その後紹聖二年、嘉定九年、淳祐二年に修治されている（同上書卷五霞浦縣塘堰）。海田と陂塘とは一體であつたとは言え、營田陂の如く、必ずしも干拓造成と同時に獨自の水利施設の築造が進行した譯ではなかった。また福建は佛教の盛行した地方で、造成工事には寺院、寺僧の關與したものが多かった。既に述べたものの外、香巖上下洋、靈石嶼（塘）田、同白麟洋田、寧德縣臨海里的赤鑑陂などがあり、赤鑑陂は北宋元祐四年に士民林圭と聖泉寺僧養譽が陂下百六十戸に提唱して築いたのであつた（淳熙三山志卷一六水）。次に沙洲田だが、閩、侯官、懷安三縣に分布している。「兩熟の潮田世に獨り無く……、潮田倚郭三縣を出でず」（淳熙三山志卷四一）とあり、沙洲田と潮田とは分布を一にしている。後述の如く、潮田は潮汐を利した洲田であり、淳熙三山志の言う沙洲田とは同書中に見える潮田を指すものと考えられる。

〔興化軍〕莆田縣の沿海地開發も比較的早くから進んでいる。森田明、周藤吉之氏の研究によれば、瀕溪の北、北洋の組織的開發は、唐建中年間に邑人吳興が防潮隄を築き田を造成し、延壽陂を築いて四百頃を灌漑したのに始まる。南洋の場合、唐元和八年、觀察使裴次元が海に隄を築いて田三百三十二頃を造成している。莆陽比事卷七に「縣、舊と田多く蒲生ずるの故を以て莆田と曰う」とあるのは、開發の當初の情況を示すものであろう。この地方では濱海の新田の隄防を長圍と言つたらしく、南宋、劉克莊、後村先生大全集卷八八新收三步泄に「瀕海の田皆な隄に依りて固と爲し、長圍と曰う」と

ある。しかし、莆田平野の開発に畫期的進展をもたらしたのは、北宋熙寧八年、福州侯官の人李宏による木蘭陂の建設であつた。<sup>(16)</sup>これによって先ず南洋の斥鹵の地が悉く化して上腴となり、次いで元皇慶、延祐年間に總管郭朶兒等により萬金陡門<sup>(17)</sup>が設置され、これより北洋も陂水の三分を受けることになる。木蘭陂の外、南安陂、太平陂等の設置により從來海潮の倒灌に悩んでいた濱海田は淡水を得、後世の所謂洋田という第一等地の基礎が形成されるのもこの時期である。ただ、北宋大中祥符中、北洋に農業用水源を絶たれた沿海鹹地一千餘頃<sup>(18)</sup>が存し、殆んど放棄されていた事からも分るように、濱海新田開發の前線は先の洋田の外縁で進行していた。

〔泉州〕當該時代の史料には、濱海田造成の具體例は見當らない。唯だ晉江縣の水利施設について「凡そ諸ゆる港、浦、埭、塘皆な古人の海を填めて之を成る」(讀史方輿紀要卷九九)とあり、上記の各種水利施設が濱海田造成に伴なうものであつた事を示している。以下、そうした施設の築造例を以て開發狀況を概観するに止める。晉江縣の東南、登瀛里にある天水淮は、唐大和三年に刺史趙榮が開鑿した用水路で、筍、渚溪水を大渠一道二千九百丈及び小渠八道積長二千五十八丈を以て、濱海の鹹鹵の田百八十頃に導き、潮汐の來去に従い三十五所(後に三所)の涵を啓閉して排水した(同上書、乾隆晉江縣志卷一潮塘陂埭)。同縣二十九都の六里陂は、永靖、和風等六里に亘り全縣の水田三分の一を溉す、縣最大の水利施設である。水路の途中及び末端に數箇所<sup>(19)</sup>の斗門を築き淡水を潂め海潮を捍いでいるが、その一の煙浦埭(隄三萬丈、斗門)は北宋期に成立し、その後治平三年、建中靖國元年、靖康元年に倒壊し、その都度修復されている(乾隆晉江縣志卷一、卷一六明、陳琛、論六里陂水利書)。海塘(防潮隄)の修築が本格化したのもこの頃で、同上書卷一六明、蔡清、海岸長橋記に「海濱の地、鹹流浸潤して田るべからず。昔人因りて大堤を築き、以て其の流を止め、而して内に澗水を蓄め、以て田を溉すこと殆んど千餘頃たり。傍堤の邊、石を駕え以て行者に便すること七百七十餘間を計え、通じて海岸長橋と名づく……其の工最も鉅く其の利最も溥し。故老、遺文の所傳に據るに、橋は宋乾道の間に成り、其の事を主る者は陳君亢なり」とある。こうした海水遮斷の爲の施設は、この時代他にも盛んに築造されているが、海潮の干満を利用した所謂アオ

灌漑<sup>19</sup>も行なわれていたらしく、北宋、蔡襄、端明集卷三八尙書司封員外郎曹公墓誌銘（大中祥符五年進士）に「瀕海に渠道有り。潮波を迎えて旁田數十里を溉浸す。渠水湮塞してより田蕪れ租逋す。公（曹脩睦）渠を疏し流人の業に還るを與す」とある。また南宋、樓鑰、攻媿集卷八八數文閣學士宣奉大夫致仕贈特進汪公行狀に「（海）中に沙洲數萬畝有り、平湖と號す。忽ち島夷の毗舍邪と號する者の爲に奄いに至り、盡く種うる所を刈らる」とあり、南宋隆興七年頃、數萬畝に及ぶ瀕海沙洲があり、既に種植されていた。

〔漳州〕 乾隆龍溪縣志卷六水利の冒頭に同縣の水利概況を述べて「南より東は則ち海壩なり。鹹鹵にして用うべからず。支津交渠を以て旁注遠達すること有るに非れば、則ち田は皆な棄地となる。宋の丁知幾、官港を開き柳營江の水を通ず。文甲より石美に至る三十餘里、田二百頃を溉す。後人因りて陂を築き閘を建つ。一時の疏鑿の功、萬世に及ぶ。且つ鹹鹵は惟だに用うるべからざるのみならず、又た潮蓄に苦しむ。海水一たび蕩滌すれば、地は數載不毛となる。故に十一都の岸十有三、二十八都の岸三十有三、二十九都の埭十有七、多く之を爲る。所以に之を防いで而る後、斥鹵憂えず、畚挿阻む無し」とあるように、縣東南部、海壩の地の開發では隄埭、溝渠等の築造が不可缺であった。南宋淳熙二年、丁知幾兄弟が建設した官港は、その本格的工事の始まりで、長三十餘里、濶十八尺、深十六尺の溝渠、斗門二所を備えていた（同上書卷一五人物）。同縣八、九都（後に海澄縣の地）の田を溉す太保陂も、そうした施設で、萬曆漳州府志卷三〇元、林魁、太保陂記に「（上略）乃ち昔、都官謝公海に築いて田を成る。初め斥鹵を病う。繼いで太保陳公復た十一都九十九坑の水を引いて八都に流衍し九都に注ぐ。候山に陂を築き圳を開き、順いて之を導き以て田を灌す。下りて普賢に至り、復た斗門を砌<sup>いづみ</sup>し以て瀦瀉に便す。其の地遂に沃土と成り、歲收は鉅萬たり。陂は陳太保と號す。官陂の圳の長三千餘丈、濶二丈、深七尺たり」とある。北宋熙寧六年進士の謝伯宜<sup>20</sup>が致仕後、濱海田を造成した當初は十分なる水源を確保しておらず、その後の太保陂の築造を以て始めて安定した水の供給を得たものと考えられる。また南宋、陳淳、北溪先生全集卷二六上溥寺丞論學糧に「本學の官洲莊田に三洲有り。年々占穩穀一千五百斛を科す。其の大なる者を北洲と曰い、該に九

百六十斛を納むべし。次の二洲は共に五百四十斛。今北(洲)は洪水の爲に流崩して、未だ柱應有らず。淳熙の間、趙師治は田を舍して學に入る。其の田の下に沿生せる泥淤、學は中歲に萬草錢一百九十一貫を收むるも、殆んど以て北洲の崩れし所の地位を裨補するに足らず」とあり、租穀千五百斛もある相當大きな洲田であつた。

〔潮州〕南宋、黃榦の黃勉齋先生文集卷一二辭知潮州復鄭知院に「並海の田、鹹潮浸灌す。今、雨を得ると雖も亦た近城の田に及ぶ無く皆な耕すべからず」とあり、水利事情の悪い濱海田が開かれていた。また潮州でも贍學田の中に沙洲田が含まれていた。<sup>(2)</sup>

〔廣州〕珠江下流デルタは、淮南、兩浙と共に沙洲、沙田の發達した地域である。具體例には乏しいが、南宋、方大琮の鐵菴方公文集卷三三廣州乙巳勸農に「廣(州)の諸邑を以て之を言えは、清遠、懷集(縣)は號して山邑と爲し、多く是れ山田なり。南海、番禺、增城、東莞、新會、香山邑皆な海に瀕し、大半は潮田爲り。潮田宜しく荒蕪無かるべし」とあり、濱海の縣にはよく潮田が發達していた。元一統志卷九廣州路風俗形勢にも「山海に皆な田有り。山田は力を用いることと中州の田の如し。(中洲田は)潮汐一再至り、灌漑を煩わさず……、魯國先生唐庚字子西嘗て詩に『潮田に惡歲無し……』と云う有り。蓋し其の實を紀すなり」、「海田の西北に在る者は浪水、鬱水の衝に當る。積雨の後、數千里の水犇湍して下り、必ず巨湧有り。或は歲に三四たび浸し即ち退く。浸すこと久しければ必ず田を敗す」とある。中洲田、潮田、海田ともに滿潮時には冠水するような濕田であり、その點を灌漑の勞無しと強調している。有名な南海縣の桑園圍に代表される、この地方の圍基もこの頃から開發が着手されたものと考えられる。

## 二 濱海新田の構造

前述の如く、新たな濱海田造成は海灘、沙洲の形成を前提とする。即ち少くとも干潮時には海面上に泥淤が露出する段階に至り、造成の爲の人爲が施される。つまり自然の沙漲を待つだけでなく、泥淤の沈積を促進する爲の措置で、先引王

禎農書の塗田の條に言う「(塗)上に鹹草の叢生する有らば、潮<sup>みちしほ</sup>の來りて漸く塗泥を惹く有るを候つ」は、蘆葦等の耐鹹性植物の栽培による促淤効果を狙ったものである。同書沙田の條に言う「四圍は蘆葦駢密にして以て隄岸を護る」とは、隄外沙洲の伸張と護岸効果を意圖したものである。「蘆の繁茂が鹽性土壤开拓の第一歩である<sup>(24)</sup>」といわれる所以もそこにある。次に造成豫定地を檣<sup>くわ</sup>や土石壁で圍繞し外潮から遮斷する。この潮止め隄防は、圩岸、隄岸、長圍、塘、埭などと呼ばれ、開田後も風潮から農田を護る重要な機能をもつ。元、大徳昌國州圖志卷三にも「所謂塗田は、周圍皆な鹹鹵浸灌するところにして、民自ら本を備えて隄岸を築捺し、塗をして田と爲さしむ。苟し時を失して修めず、隄岸崩漏すれば、田復た塗と爲る」、「吾が州の周遭皆な海にして、毎歳の秋潮に捍海の隄、必ず決する者有り。惟だに米の收むべきもの無きのみならず、抑々且つ田の種實すべき無し」とあるように、不斷の隄岸の修治は塗田の豊凶を左右するのみならず、塗田の存否自體に係わる問題であつた。また、南宋、劉克莊の後村先生大全集卷八八新收三步泄に、隄長千餘丈、隄内田數百畝の干拓田の泄(排水門)を修治した際、「塘民曰く、猶お未だしなり。内基は固しと雖も外捍は密ならず。久しくすれば將に復た圯れん。石を索めて二馬頭(塘)を爲り、以て潮を禦がんことを請う」とあり、隄體に直角に突き出した補助隄を以て、水門設置箇所<sup>(25)</sup>の如き隄塘の弱い所や潮波激しい所を補強している。次に隄内施設としては、先引の王禎農書の塗田の條に、田邊に甜水(淡水)溝を開鑿し、雨潦を溜めて早に<sup>ひやくり</sup>漑ぐとあり、沙田の條には、田中に潮溝を貫通せしめ早に田に注ぎ、田傍に大港を繞らし<sup>なぐる</sup>潦には田中の水を排すとある。海塗田中の水溝は、その造成直後は土壤中の鹽分洗滌のため不可缺の施設であり、淡化後は潑水池<sup>(26)</sup>もしくは引水溝として機能する。沙田中の潮溝は、字の如く潮を導く、水路であるが、潮水が鹽水であれば、有害無益である。天下郡國利病書第二六冊(福州府志、福州潮汐)に「又た一等洲田有り、潮<sup>みちしほ</sup>至れば則ち禾を没するも、汐<sup>しほ</sup>き禾を害う無し。人牛を假りずして收穫は自若たり。有力の家便に隨ひ搥挿す。但し東流西復して遷徙常ならず」とあるように、潮溝は滿潮時の所謂のアオを利用できる沙田に設けられたものである。先述來の「潮田」とはこうした水田を指すものと考えられる。干拓田の水溝の具體例としては、福州長樂縣の東洋塘

で「溝一、長三百四十丈、闊八尺、深五尺」、福清縣の東禪塘で「埵内、港水三道」、靈石白麟洋で「港大小十有一」（淳熙三山志卷一六）などが見える。そして、これら水路の末端には隄を開いて水門が設けられている。先の東洋塘の場合「啓閉、寶を以てす」とあり、東禪塘では「泥門一十五を設け、淤閉を防ぐに則ち泥門を以て之を通ず。漲益すれば則ち斗門を以て之を洩す」（同上）とある。また先述の明州昌國縣の普慈禪院新豐莊に見える石楔三間も斗門である（乾道四明圖經卷十）。この斗門を閉せば、隄内の水溝は一種の溜池になる譯だが、別に瀦水池を備えるものもあった。台州金石錄卷五大宋台州臨海縣佛窟山昌國禪院新開塗田記の案文によれば、報恩光寺との争訟の際の實測面積は五百二十二畝餘で、その内譯は「地已墾者一百二十畝而縮、未墾者二百四十畝而贏、瀦水之所一百三十畝有半、而塗田之増者未已」とあり、築隄後も隄内の造田が緩慢であつたこと、瀦水池が設けられていたことが認められる。ただ隄内の最卑處が悪水溜として放置される場合があるから、これもその可能性が無い譯ではないが、幾分面積が廣すぎる。先述の福州福清縣萬安里香巖上洋の「水を積めて田に溉ぐ者又た四十五畝（有）奇」（玩齋集卷七香巖寺復田記）の場合は明らかに瀦水施設である。

### 三 濱海新田の水利事情

常識的に考えても、濱海新田の水利事情が良好であるとは思えない。にもかかわらず、塗田の稼收は常田に比べて利は十倍（前引王禎農書）とか、廣州の潮田に惡歲無し（前引鐵菴方公文集卷三三）と言ひ、福州の潮田は再熟（淳熙三山志卷四一）を誇っている。これらは濱海新田に對する高い評價を示すものであると言えよう。萬曆漳州府志卷五賦役志土田では、各種農田を次のように等級附けしている。「漳州の田、其の等に五有り。一に曰く洋田（平曠沃衍にして水泉常に滿つ。先んじて水を得るものを上と爲す。人力を用いて轉致するもの之に次す）。一に曰く山田（山に依り崖に靠り、地は多く瘠薄なり。水泉有るものは其の田も亦た中。水泉無きものは下と爲す。又た坑瀧の田有り。旱を憂えず水を憂う。其の田は下上）。一に曰く洲田（填築して成る。地は多く肥美、然れども時に崩決の患有り。淡水を得るものは、其の田は上中。海

潮に近きものは中中)。一に曰く埭田(埭を築いて潮を障る。内に淡水を引き灌漑を資く。然れども修築の費有り。且つ天時久旱有れば、水も亦た鹹鹵にして、其の田は中中)。一に曰く海田(其の地海に瀕し鹹鹵なり。内に泉水無く、外に淡潮無し。雨暘時若<sup>はとよ</sup>れば、則ち所收亦た多し。旬日雨ふらざれば、則ち彌<sup>み</sup>望<sup>わたす</sup>皆<sup>ひでり</sup>な赤。其の田は下と爲す)。大率ね同じからざること此の如し」とある。

このように農田の等級は略ぼその水利條件によつて決まる。先述の如く呼稱は地方によつて異なるが、洋田(上)山田(中)下上)洲田(上中)中中)埭田(中中)海田(下)の等級は、山田を除き濱海田一般に妥當し、海水から遠のく程高い評價を得ている。埭田とは「其の田海に瀕し、隄に藉りて護りと爲す。土人は隄を呼びて埭と曰い、亦た海岸と曰う。田を呼びて埭田と曰う」(道光廈門志卷九義倉埭田碑記)とあり、宋代の「埭海爲田」(莆陽比事卷七)「隄海以爲田」(朱松、韋齋集卷二二代福州禱雨諸祠文)と同じと見てよい。即ち埭田は海塗田であり、海田は獨自の水源無き天水に依存する海塗田である。海塗田造成が盛んに行なわれていた先述の昌國州(明州昌國縣)では、「其の隄岸に近き田畝は鹹水と鄰を爲し、止だ稗を植うべし。其の隄岸を去ること稍や遠く山脚と相接すれば、方めて稻を植うべし。若し久旱に遇えば、則ち鹹氣蒸鬱し、禾は盡く枯槁す。設し久雨或れば、則ち山水泛溢し、禾は盡く淤没す。惟だ雨水調勻<sup>まんべんなく</sup>して方めて熟するを得べし。然る後に、其の他の州縣の下の所の收の數に及ぶ。又兼ねて本州別に淡水の河港無し。山水の注下する去處、皆な潮と通じ、鹹水以て衝入し易し。此を以て竝びに肥田無し」(大德昌國州圖志卷三官田土、塗田)とあり、昌國州の塗田は水源となるべき淡水河港なく、雨水に恵まれた時のみ、收穫が期待でき、それも内陸州縣下等田の水準に相當する程度であった。島嶼という特殊な條件、多少の誇張を差引くとしても、基本的には海塗田の生産は不安定なものであった。興化軍莆田縣の北洋の沿海鹹地の場合、蔡襄、端明集卷二六乞復五塘劄子によれば(長文なので要旨のみ記す)、もと縣北興教里には勝壽、西衝、大和、屯前、東塘の五塘が存し、塘下の沿海鹹地一千餘頃に灌注し、八千餘家が耕種し業としていた。ところが、大中祥符の頃、陳清等「秋(荻)蘆陂より渠を開き水を引いて屯塘下の民田を灌注し、却て五塘を決去して田



を爲らんことを」請うた。この時は許可されず、天聖中、こんどは官戸、形勢戸と計會して上件塘内地土を陳請し、屯前、大和、東塘三處を得る。次いで寶元中には勝壽、西衝二塘も許されて水を去り田となる。その爲、もと塘水に仰いで灌漑していた地は盡く焦旱となり、百姓は廢塘の不當を官に訴えたが、申理を許されなかった。蔡襄は沿海鹹地の状況を、「五所の陂塘を決去して自り已來、沿海鹹地は只だ天雨に仰ぎて種うる有るも收無し。州縣多く是れ稅賦の放免を與さず、是れ人戸の逃移を致す。見居者も只だ土を括して煎鹽するのみ」と述べ、五塘の回復を請うている。廢塘派たる官戸、形勢戸三十餘戸と沿海鹹地農民八千餘戸との力關係の結果とも言えるが、事實經過が蔡襄の言の如くであるとすれば、軍縣の判斷はかなり強引である。前三塘Ⅱ大和塘（五代閩時置）屯前塘東塘（唐太守何玉鑿）は、北宋嘉祐中（一〇五六）太平陂（知軍劉諤創）成立時に廢して田となり、後二塘Ⅱ勝壽塘（唐貞觀置）西衝塘は、宋初南安陂が設置された後、廢されて田となっている。<sup>(26)</sup> 蔡襄が福建轉運使となった慶曆四年（一〇四四）頃、既に南安陂は成立しており、太平陂は未だ築造されていないが、その前身と思われる荻蘆溪からの引水渠は設けられている。即ち五塘被惠田には、より安定した水源たる荻蘆溪二陂からの引水で既に一應カバーされていたのである。同縣の南洋の五塘（横塘・新塘・陳塘・唐坑塘・許塘）が、有名な木蘭陂成立時に廢されているのと同様の理由である。つまり沿海鹹地は本來の五塘被惠田の餘水利用という弱い立場にあり、水利再編成時に當り十分顧慮されなかったものと考えられる。軍縣の措置もそうした事情の反映とすれば、全く理由のないものではない。南宋、方大琮、鐵菴方公文集卷二〇何判官に「莆（田）は土狭く人稠し。甚しく豊年と雖も、僅かに半歳の食を足すのみ。大率、南北の舟に仰ぎ、而して南に仰ぐ者最多と爲す。春夏の交、又た二麥に仰いで以て接濟す。去歲、二洋甚しくは歉爲らず、而るに濱海の處、鹹水に傷けられること亦た少からず。又た麥收常年に及ばず。今、山谷の民尙お一兩月を足し、洋（田）海（田）の細民錢を持ち城に入り山に入る者數うる無し」とあり、莆田縣はもとと食糧の自給のできない地方であったが、同じく凶作と言っても、比較的水利事情の良い南北二洋の田と海田とでは、被害の程度には自ら差が存した。

しかし、濱海新田として劣悪な水利事情のまま放置されていた譯ではない。例えば、莆田縣の場合、宋時の洋田即ちデルタ下部の開発の着手は唐代であり、當時、溪澗に設けた陂や塘（溜池）灌漑に依存した高田に對し、洋田は濱海新田であった。そして南洋の洋田への安定した水の供給を可能にしたのは北宋熙寧年間の木蘭陂の建設であつた。この時点で洋田の外周では、餘水利用を期待した新田（海田）造成が更に盛んになったろう。明代に至れば、先の萬曆漳州府志が述べる如く、洋田の等級は「上」に、海田は埭田へ、等級は「中中」へとランクアップする。<sup>(29)</sup> その間に水利施設の擴充發展が存したことは申すまでもないが、木蘭陂設置後の施設面での變化は、先ず前述の溜池の廢止である。次に排水陡門の設置で、林墩、洋城二陡門は陂成立時に、東山陡門は南宋時にそれぞれ築造されている。更に隄内の地勢の高低に相應した水の供給を圖る爲の通溝陡門が設置され、大小導水路の整備と相俟ち、愈々精妙な水利用を可能にする組織が形成される。<sup>(30)</sup>

つまり、宋代の莆田縣は、木蘭陂成立を契機とする水利の再編成期に在つたと言え、これは下部デルタ開發に對應するものと考えられる。この種の水利用の再編成は、既に指摘されている如く多少の時間のずれはあるが各地で見られた。例えば、台州黃巖縣の場合、康熙黃巖縣志卷七記の南宋、彭椿年、重修諸聞記に當時の水利事情を次のように述べている。即ち「台の五邑のうち黃巖は壯邑爲り。境の海に瀕する者率ね三の一。故に其の地勢は斥鹵たり。山を抱き塗に接し、川は深源無く潦し易く涸れ易し。畝澮の利に資らざれば則ち可ならざるなり。官河八郷爲里九十を貫き、支涇の大小の委蛇、曲折する者九百三十六。其の水を洩して海に至る者、古來、堰を爲ること幾んど二百所。以て民田七十萬畝を蔭するに足れり。元祐の間、羅公適、本路に持節たり。其の埭の大なる者に因りて諸聞を建置す。今の黃望、石湫、永豐、同洋は皆なり。其の遺跡なり……」とあり、また同上、南宋の王居安、濬河記にも「黃巖縣の田を爲すこと百萬畝ばかり。而して水郷の田、實に大半に居る……、元祐以前、初め未だ聞有らず。大率ね埭を爲り以て水を堰める。頗る高田の利を爲し、下田は之を病う。水潦大いに至れば、下郷之民、十百もて群を爲し、挺を挟み刀を持ち以て埭を破り、遂に鬭爭格殺の事有り。是に於いて郷先生羅公適、本路に提刑たり。始めて聞を建つるを議る。高下を酌し以て啓閉を謹にし、仇怨を解き以

て郷井を全うす。意則ち美なり……」とある。兩記を要約すれば、黃巖縣の耕地百萬畝のうち三分の一は瀕海斥鹵の低田であった。同地の基幹水利施設は官河で、その支涇九三六道と埭二百所を以て七十萬畝を灌漑していた。しかし埭は元もと高田の灌漑の爲に設けられたもので、水潦の際、低田の農民は往々埭を破壊して排水を強行するに及んだ。そして北宋元祐年間に至り提刑使羅適が從來の小規模分散的な二百所に近い埭を數箇所の際に整理統合して、高郷下郷の對立を解消したといふのである。以後南宋の閒にも幾つかの聞が増設され（同上、林昉、先賢祠堂記）、「黃巖熟すれば則ち台州は飢饉の苦無かるべし」（朱文公文集卷一八奏巡歷至台州奉行事件狀）と稱されるに至るのである。

#### 四 濱海新田の農業——占城稻と二期作——

一般に水稻二期作栽培は、閒作、連作を問わず、單作に比べて毎畝收量を増加させる。<sup>(32)</sup> 解放後の中國における雙季稻推廣キャンペーンも、土地利用の高度化、稻米生産増を目指したものであった。<sup>(33)</sup>

既に指摘されているように所謂再生稻による二期作栽培は西晉時代まで遡り得るが、二期閒作、二期連作は宋代に初めて認められ、地域的には福州以南の沿海地方で行なわれていた。<sup>(34)</sup> 南宋、衛涇、後樂集卷一九福州勸農文によれば、福州府下十二縣のうち三分の一が瀕海の縣で、「負山の田は歲々一收し、瀕海の稻は兩獲」していた。淳熙三山志卷四一物産には「兩熟の潮田は世に獨り無く……、潮田は倚郭三縣を出でず」とあり、輿地紀勝卷一二八福州詩、謝泌長樂縣總序にも「潮田稻を種え重び穀を收む」とある。以上、史料の示す所によれば、二期作栽培は沿海州縣の潮田、即ち濱海新田で行なわれていた。次に、二期作栽培の使用水稻品種について、永樂大典卷五三三四三潮字號、潮州府志、土產所引三陽志に「（潮）州地東南に居り暖くして穀嘗に再熟す。其の夏五六月に熟す者を早禾と曰い、冬十月（に熟す者）を晚禾と曰う。穩禾是に類し、赤糙米販して他州に之き、金城米と曰う。秔・秬の若きは即ち一熟にして、膏腴の地に非れば種うるべからず。獨り糙赤米は（地を）擇ばずと爲す」とあり、潮州では、穩禾（晚）、金城稻（早）の占城稻系早晚二種が使用されてい

た。潮州の場合、瀕海田との關係が不明だが、水稻二期作栽培と濱海田と占城稻との關係が概ね推測し得る。

先ず濱海田と占城稻との親和性について述べると、先述の郵縣翔鳳郷に存した元、慶元路儒學田三一二畝では、早黃穀という占城稻系の早稻種が栽培されていた。<sup>(69)</sup>この品種は、宋、陳男農書卷上地勢之宜篇に見える黃綠穀という早稻種で、陳男はその早熟性を利して湖田（低濕田）での栽培を勧めている。<sup>(67)</sup>また、南宋、漳州學田の一つの洲田では、占糧穀という（潮州の糧禾に同じ）占城稻の晚稻種が栽培されている。金城稻の例からも解るように、粳稻、糯稻が膏腴の地に限るのに對し、占城稻の特徴は總じて優れて耐旱、早熟である點に在り、水利事情の悪い高仰田における水稻栽培面積を擴大したとされている。<sup>(68)</sup>と同時に占城稻は陳男も勧めている如く、その早熟性の故に低濕田でも有効であった。<sup>(69)</sup>

更に考えられる事は、占城稻の耐鹹性である。例えば先の金城稻について、同治上海縣志卷八物産には「米紅く尖る。性は硬く、人赤米と呼び最も下品と爲す。早に耐え、高田に種うべし」とあり、民國上海縣續志卷八物産の金城稻には「府志は松江赤に作る。性は鹵を畏れず、鹹潮に當うべし」とある。明代、膳脂赤という耐鹹品種が存した事が知られるが、これは占城稻系の赤米である。<sup>(40)</sup>授時通考卷二二穀種稻三の泉州惠安縣の條に見える赤米青晚という耐鹹品種も赤米で、「風と水旱に耐え、亦た能く鹵氣に勝る。埭田多く之を植う。其の種と收と俱に早稻に遅るること一月」とあり、埭田で多く栽培されていた。以上から、濱海新田における占城稻系品種の普及は其の耐鹹性にも因ることが認められる。

次に濱海新田と二期作栽培との關係について述べる。水稻二期作栽培は基本的には、日照時間（緯度）、氣溫、降水量などの氣候條件に規定される。但し如上の條件を満たす地域の總てで二期作栽培が行なわれる譯ではない。S・ラウスキー氏は、明代福建の沿海地方における水稻二期作と内陸地方における單作という明瞭な相違に注目され、その要因を氣候、水利、地形、勞働力の需給、品種改良、小作契約の内容、市場關係等の各方面から検討され、市場關係が最も有力であったとされた。ラウスキー氏の所論を要約すれば、二期作が可能な客觀的條件を備えている事と實際に行なう事とは別次元の問題であり、早晩稻二期作栽培か晩稻單作（麥等の裏作を含む）かの選擇は、量を取るか質を取るかの選擇であり、それ

はよりどちらの市場需要が大きいかによって決まるという事である。従つて農民段階での選擇の動機は利潤であつた。氏の行論の前提は、水稻二期作は他の如何なる作物との組合せよりも有利であり、少くとも收量において勝つてゐるという事である。しかし、南宋の眞德秀、西山先生眞文忠公文集卷四〇福州勸農文では、福州は「土狭く人稠く、歳としり大熟と雖も、食且つ足らず。田の兩收する或りて、再び秋みり有りと號するも、其の實甚だ薄く、一穫に如かず」とある。この文が言うように當時の福州の二期作が收量においても劣るとすれば、少くとも福州農民の選擇は積極的な利潤動機に因るものとは言えない。ここで想起すべきは、福州の二期作が潮田、瀕海稻に限定され、潮州の二期作で一作目の栽培品種であつた金城稻が土地の肥瘠を問わない品種であつた事である。時代は下るが、清代泉州永春縣では、「案ずるに、二熟の穀、之を一熟と較ぶれば、獲る所亦た相い等し。但だ二熟の穀は亢旱を怕るること少く、故に之を種うること廣し。永（春）の水田は荒旱の憂少く、故に種うる所多く一熟なり」（重纂福建通志卷六〇物産、永春州）とあるように、二期作の收量は單作と同等であり、また二期作を行なうのは亢旱を避けるためであり、永春縣の水田が多く一熟であるのは水旱の憂が無いからであつた。濱海の龍溪縣では「二熟の穀、之を一熟と較ぶれば、獲る所亦た相等し。但だ二熟の穀、早に耐う。故に多く之を種う」（乾隆龍溪縣志卷一九物産）とあり、同様の理由で二期作を採用している。その上この比較では收量は同じでも投下勞働等のコストは度外視している。孰れを採用するかは、決して同一條件の下で決められておらず、二期作は條件の悪い水田における危険回避の選擇の結果であつた。<sup>43</sup>そう考へる時、單作より收量の劣る二期作、濱海田たる潮田、市場價值において劣るも早熟性、耐水旱性に優れた占城稻の三つの要素の關連が矛盾なく説明し得る。

又た濱海の新開發の含鹽土壤の改良には、水稻一期栽培より二期作の方が效果的である。これは從來から華南沿海農民の間で知られてゐた農諺（鹽隨水來、鹽隨水去）と改良法の利用によるものであるといふ。<sup>44</sup>

最後に二期作に要する勞働量の問題が残る。二期間作、連作の孰れの場合も投入される勞働量は一期作よりもはるかに大きくなる。解放後の雙季稻推廣キャンペーンで先ずつき當つた壁は勞働力不足であつた。<sup>45</sup>唯だ、勞働力問題は人口密度

(人口／耕地)と同一でなく、福建の場合、二期作の阻止要因でない事はラウスキー氏が検証された如くである。<sup>(46)</sup> ならば、濱海田の水稻二期作栽培を可能にした投下労働は如何にして解決されていたのか。それを解く鍵は濱海新田における経営面積に存すると思う。例えば、宋、秦九韶、數書九章卷五、計地容民には、「問う。沙洲一段あり、形は棹刀の如し。廣一千九百二十步、縱三千六百步、大斜二千五百步、少斜一千八百步、以て流民を安集するに、毎々一十五畝を給す。地積と民を容ること幾何なるかを知らんと欲す」とあり、沙田開發の際の一戸當りの支給額を十五畝としている。いかに下層農民の経営面積とはいへ、狭すぎるように思われるが、先述の慶元路儒學海塗田の場合も、一段二一二畝(二〇戸)、一段二〇〇畝(二〇戸)であり、一戸當り十畝前後となる。又た先の福建、莆田縣の場合、五塘の廢止によつて殆んど放棄された沿海鹹地一千餘頃(八千餘戸)、廢塘爲田百餘頃(三十餘戸)となる。廢された五塘跡地を入手した官戸形勢戸の一戸當り平均三三三畝に對し、濱海細民は僅かに平均一二・五畝である。<sup>(48)</sup> こうした十畝前後という額は極めて珍しいと言ふ譯ではないが、當時の肥沃な浙西平野の平均的佃戸の経営面積三十畝という例に比べれば、<sup>(49)</sup> かなり零細であると言えよう。即ち宋代、濱海新田の場合、水稻二期作に要する多大な労働量は、狭小な経営面積でカバーされていたと考えられる。そもそも、二期作が一期作に比べて增收の目的を實現する爲には、水利や労働力の外、肥培や土壤の選擇が肝要であり、それら條件を無視した二期作化は反つて減收に結果する。<sup>(50)</sup> 先述の水稻二期作の所收が「一穫に如かず」という評價は、更に宋代という時代的制約を勘案すれば、十分根據のあるものであると考えられる。以上要するに宋代の濱海新田における占城稻系品種の採用といい、水稻二期作栽培といい、いわば已むを得ざる選擇であり、濱海二期作田が内陸水稻單作田より高い生産性もしくは高い技術水準を示すものでないというのが私の考えである。

そうであるとするならば、逆に生産性が高くも且つ不安定な濱海田の開發が、前章で見た如く、かくも盛んであったのかという疑問が生じる。この事は、先述王禎農書の「稼收が常田に比べて利十倍」という塗田に對する高い評價の解釋とも關連する。先ず考えられるのは、淳熙三山志卷一二版籍類三沙洲田に「紹興五年、提刑司奏す。漳、泉、福州、興

化軍、各々海退淤田有り、江漲沙田有り。豪勢の家は詭名請射し、歳々増廣するも未だ嘗て自陳せず、或は已に請税するも簿籍に登載せざる者有り。檢量して出賣せんことを乞う」とあるように、正當な法手續きを経ない事による利得であるが、官僚としての王禎の經歷<sup>62</sup>からすれば、考えにくい。次に租額の面から見れば、塗田の租課は他の官田と比較してどうであったか。天下郡國利病書第六冊蘇松、田地の條所載の宋官田每畝租によれば、公田（一石五斗七升一合四勺）、圍田（四斗、三斗）、沙田（三斗、二斗）、成田（二斗）、營田（四斗、三斗、二斗）などとなっており、塗田の記載はない。淳祐玉峯志卷中税賦志、官租に塗田の項があり、圍田（四斗）、營田、沙田、投買常平田（三斗）、沙塗田（二升）となっている。沙塗田の租は沙田の十分の一以下である。具體例では、元、昌國州の官田中塗田の租は每畝二升〇中統鈔六分半となっており（大徳昌國州圖志卷三）、先の規定と一致する。兩浙金石志卷一六元慶元路儒學塗田記によれば、明州鄞縣翔鳳郷の前宋贍學塗田の租は、二斗三升（十二都田）、三斗六升（十三都田）であり、同じく定海縣にある廣惠院田では、洵湖田（二石二升）、舊海塘田（三斗）、新海塘田（二斗）であった（寶慶四明續志卷四廣惠院田租總數）。廣惠院田のうち鄞縣、奉化縣にある水田、湖田等の租が概ね一石以上であるのに比べると、先の新舊海塘田の租二〜三斗は低い租額といえる。むろん海塗田と雖も、新舊によって差がある如く、開田後の年數（熟田化）によって租課の査定が變る場合もあるが、全體として海塗田の租が他の官田の租より低く抑えられていた事は認められよう。従つて王禎農書の海塗田に對する高い評價は、必ずしもその生産性の高さに因るものでなく、主として如上の租課の低い査定や開發時における「荒田法」<sup>63</sup>の適用など制度的條件を考慮した表現ではなかったかというのが私の解釋である。

事實としての開發の盛行は、基本的には人口増加、都市化の進行等に基づく耕地需要の昂まりに因るものだが、この種の新田の開發者の多くを占める寺院、有力の家、兼併の家といった層にとつて、直接開發に向わしめたものは、如上の制度上の恩典よりむしろ、故意に官への申告を怠ったり、虚偽の申告等から期待できる利得であつたと思われる。

## むすび

以上述べ來った所を要約して結びに代える。宋元時代、杭州灣南岸の紹興府、明、台、溫の各州から福建の福州、興化軍、泉州、漳州、更に潮州、廣州にかけての沿海地方では、濱海低濕地の干拓が盛んに行なわれ、開かれた新田は、海塗田、海田、沙塗田、潮田など多様な呼稱で呼ばれた。この種の新田造成は先ず隄塘を以て圍繞し海潮を遮斷する事から始まり、隄内には排水斗門、水溝、潑水池などを備えていた。概して濱海新田の水利は天水や古田の餘水利用に止まることが多く、特に開發の當初においてその傾向が著しかった。しかし前代からの開發地では、時間の経過、新田面積の擴大に伴ない、從來のいわば高田中心の水利體系も新たな水源の確保や水利施設の建設などの改良工事によって、濱海新田も包含したものに改變しつつあった。水利改良工事の實現した濱海田では梗稻の晚種が栽培されていたと思われるが、未だ排水不良地や天水依存、餘水利用段階に在る濱海新田では占城稻系品種が栽培されていた。それは占城稻の耐旱、耐鹹性、早熟性を利用したものである。また當時福州以南の地で行なわれていた水稻二期作栽培も、占城稻系の早晚種を使用したもので、多くは濱海新田で行なわれていた。含鹽土壤の改良には單作より二期作の方が効果的であること、また十〜十五畝という狭小な經營面積が、多大な勞働力を要する二期作に適しているなど有利な条件も存したが、この濱海新田における水稻二期作栽培は晚稻單作との比較で、質より量を選択した結果ではなかった。むしろ、それは濱海新田の水利、土壤条件から已むなく危険回避の爲の選擇の結果であり、必ずしも生産性の高さを示すものでも、宋代の水稻作技術水準を抜くものでもなかった。以上、宋元時代の農業の一側面としての濱海田開發について概観したが、この問題の當該時代史における正確な定位は、農政の動向、人口動態、植民、商業、交通等との關連で爲されるべきであらう。今後の課題としたい。



## 註

- (1) 代表的なものとして、玉井是博「宋代水利田の一特異相」(『支那社會經濟史研究』所收)、周藤吉之「宋代の圩田と莊園制―特に江南東路について―」(『宋代經濟史研究』所收)を擧げるに止める。また唐宋時代の農田の存在形態を概観したものに、草野靖「唐宋時代に於ける農田の存在形態(上)(中)」(『法文論叢』三十一、三十二)がある。
- (2) 本田「宋・元時代の高塘について」(『中國水利史研究』九)、「唐宋時代兩浙淮南の海岸線について」(布目潮風編『唐・宋時代の行政・經濟地圖の作製研究成果報告書』)。
- (3) 朱福成「江蘇沙田之研究」、潘萬程「浙江沙田之研究」(『中國地政研究所叢刊』、民國二十年大陸土地問題資料)。
- (4) 同右。
- (5) 左仲謀「浙江省的海塗墾園」(『地理知識』一九七七一)。
- (6) 註(2)前掲論文。
- (7) 斯波義信「唐宋時代における水利と地域組織」(『星博士退官記念中國史論集』)、陳橋驛「古代鑑湖興廢與山會平原農田水利」(『地理學報』二八・二三)参照。
- (8) 明州の開発については、斯波義信「宋代明州の都市化と地域開發」(『待兼山論叢』三)に詳細が明らかにされているので参照されたい。
- (9) その他に、民國台州府志卷九二金石攷八佚目には「國清寺千門塗田記」、「萬年寺塗田記」が見える。
- (10) 草野靖「宋元時代の水利用開發と一田兩主慣行の萌芽(上)」(『東洋學報』五三一)。
- (11) 沙塘陡門について「平陽、瑞安治、相望三十里、其三鄉西南負山、東北邊海、爲田四十萬畝、上蓄衆流、下捍潮鹵、有沙塘爲之……、先是、村落各爲埭以潑洩水、潑時至莫肯先決、蓄害既成、互相襲擊、以便己私、乃競爭鬪、而理築之工又廢、田浸磽确、而俗益譌」(乾隆平陽縣志卷八、徐誼、重修沙塘陡門記)とあり、陡門設置後の狀況について「宋紹興三年、吳太傅蘊古倡建陡門於沙塘、合諸村之水由此門洩、以時啓閉、凡向之私堰、壩、盡廢、自後永無水患」(萬曆溫州府志卷二)とある。縣最大の斗門たる陰均斗門については、元、林景熙「霽山集卷四重修陰均斗門記」を参照。同斗門設置後の小斗門の廢止については、乾隆平陽縣志卷八、民國平陽縣志卷八を参照。
- (12) 贍軍買田の法については、周藤吉之「南宋末の公田法」(『中國土地制度史研究』所收)を参照。
- (13) 兩浙、淮南の高塘修築の沿革については、註(2)前掲論文を参照。福建の開発については、日比野丈夫「唐宋時代における福建の開発」(『中國歷史地理研究』所收)、北山康夫「唐宋時代に於ける福建省の開発に關する一考察」(『史林』二四・一三)を参照。
- (14) 種は田面積の表示單位として、福建地方で廣く使用されている。重編福建通志卷三四水利、仙遊縣の陳州八陂の條に「溉田種二十石、舊志載其溉田之種、而不言畝者、受一斗之種即屬二畝之田也」とあり、一斗＝二畝としている。
- (15) 森田明「清代水利史研究」第五章「福建における陂圳の水利組織―木蘭陂を中心として―」、周藤吉之「宋代の陂塘の管理機

構と水利規約―鄉村制との關連において―」（『唐宋社會經濟史研究』所收）。

- (16) 木蘭陂については、註(5)二氏論文の外、福建省莆田縣文化館「北宋的水利工程木蘭陂」（『文物』一九七八―）に詳し。  
 (17) 光緒莆田縣志卷二輿地。同上卷八職官志名宦傳、郭榮兒、張仲儀傳。

- (18) 北宋、蔡襄、端明集卷二六乞復五塘劄子。

- (19) 我が九州の筑後川下流、河口部などで見られる。逆潮によって遡上する「アオ」―淡水を取水する方法。中島峰廣「有明海北岸地區における水稻の旱害と水利施設の發達」（『學術研究―總合編―』一九、早稻田大學教育學部、菊地利夫『新田開發』）第五章第一節參照。

- (20) 萬曆漳州府志卷三〇海澄縣、宋鄉賢傳。

- (21) 「端平甲午、葉侯觀、撥楊眞子與黃男爭沙洲田計二百單二畝五十七步……又撥陳伯修納長洲田九十六畝二十七步」（永樂大典卷五三三四三潮字號、潮州府、學校所引の潮陽舊圖經）。

- (22) 森田明『清代水利史研究』第四章「廣東における團基の水利組織―桑園圍を中心として―」、松田吉郎「明末清初廣東珠江デルタの沙田開發と鄉紳支配の形成過程」（『社會經濟史學』四一六―）參照。

- (23) 海灘における促淤の爲の措置としては、工學的措置（丁壩、順壩等の建設）と生物利用によるもの（蘆葦、紅樹林、大米草等の耐鹹植物を植える）がある。浙江省農業科學院土壤肥料研究所編『濱海鹽土與引水種稻』（農業出版社）九一―一〇頁參照。

- (24) ソープ『支那土壤地理學』（岩波書店）一五五頁。

- (25) 明、徐光啓、農政全書卷一六浙江水利に「海邊斥鹵地方、特護塘隔絕鹽潮、雨水洗去鹵性、有圍築成田者、築堤鑿河、引內湖之水、以資灌溉、而水遠難致、雨澤稍稀、便乏車救、十年三熟、此與山鄉地形勢相類、近年民間告明官府、豁除損田畝之糧、於田心中開積水溝、爲夏秋車戽計、凡溝漚多處、其田多熟……、但細訪老農云、每十畝之中、用二畝爲積水溝、纔可救五十日不雨」とある。

- (26) 光緒莆田縣志卷二輿地志、水利。

- (27) 北宋、歐陽脩、歐陽文忠公集卷三五端明殿學士蔡公墓誌銘。

- (28) 光緒莆田縣志卷二輿地志、水利。

- (29) 明代に至るも、基本的には埭田の水利が洋田の餘水利利用に止まり、兩者に屢々争いが起った（前田勝太郎「明中期以降の福建における水利機構について」（『東方學』三三））。

- (30) 光緒莆田縣志卷二輿地志、水利。註(5)森田論文參照。

- (31) 註(7)斯波論文參照。

- (32) 間作は「早稻と晚稻とを期を分けて挿秧し、隔行間作する添挿法」（天野元之助『中國農業史研究』四一二頁）で、連作は一期目の稻の收穫後、二期目の稻を植える方法である。雙季稻はだいたい單季稻より三―五割の増收がある（同上）。

- (33) 註(3)天野前掲書四四四頁。

- (34) 再生稻は孫稻（またばえ）に同じ。刈取った後の稻株から再び芽生じ實るをいう。既に西晉の郭義恭『廣志』に見える（天野前掲書一九〇頁）。

- (35) 周藤吉之「南宋に於ける稻の種類と品種の地域性」（『宋代經濟史研究』所收）。

- 66 兩浙金石志卷一六元慶元路儒學塗田記。
- 67 天野前掲書二三三頁。
- 68 加藤繁「支那に於ける占城稻栽培の發達に就いて」(『支那經濟史考證』下所收)、註63周藤論文、註62天野前掲書等參照。
- 69 西山武一「中國における水稻農業の發達」(『アジア的農法と農業社會』所收)。
- 40 赤米については、註62天野前掲書一一五～九頁、柳田國男等編『稻の日本史』(筑摩書房)第一部「赤米」(盛永俊太郎執筆)參照。
- 41 Evelyn Sakakida Rawsky, *Agricultural and the Peasant Economy of South China* (Harvard U. P.: 1972), pp. 31—56.
- 42 粳米は稅米及び上戸の食用に供され、占城稻は粳米に比べて廉價で、中産以下の食用米であつた(斯波義信『宋代商業史研究』第三章第一節)。近代福州でも中流以上は黃尖と稱する秋期收穫米を食し、中流以下は白米、紅米と稱する夏期收穫の早稻米を常食としていた。後者は黃尖より三四割廉價であつた(南洋協會臺灣支部『福建省地理概説』)。
- 43 解放前、湖南省における雙季連作の主要分布地域は洞庭湖周圍で、氣候的により好條件を備えた湘中湘南は單季稻であつた。瀘湖地區的雙季稻栽培は水災の脅威を緩和するためであつた(湖南農學院編『湖南農業』高等教育出版社、一八六頁)。安野省三『湖廣熟すれば天下足る』考(『木村正雄先生退官記念東洋史論集』所收)參照。
- 44 熊代幸雄、小島麗逸編『中國農法の展開』(アジア經濟研究所)一〇五頁。
- 45 註62天野前掲書四四五頁。
- 46 Rawsky, pp. 35—7.
- 47 兩浙金石志卷一六元慶元路儒學塗田記。
- 48 北宋、蔡襄、端明集卷二六乞復五塘劄子。
- 49 草野靖「宋元時代の水利田開發と一田兩主制の萌芽(一)」(『東洋學報』五三—一)。
- 50 南宋、魏了翁、古今政卷一八初爲算賦附論班固井田百畝歲入歲出。
- 51 註44前掲書四五頁。二期連作の繁忙期に主要勞働力で賄える面積は三〜四ムーであるという。
- 52 周藤吉之『宋代經濟史研究』五九頁。
- 53 島居一康「宋代に於ける官田出賣策」(『東洋史研究』三六一)參照。淳熙三山志卷一二海田の項に「皇祐中、許氏請射如荒田法、今或可耕云」とある。

The measure became essential during Wudi's 武帝 time because great campaigns and water control projects were undertaken and the necessity for transporting great amounts of grain to the capital and to local places arose. This became difficult for the existent system of transportation to support. Transportation had become a factor in the crisis of the system of public finance.

## CONCERNING THE DEVELOPMENT OF COASTAL LAND DURING THE SONG 宋 AND YUAN 元 PERIODS

HONDA Osamu

During the Song and Yuan periods, the drainage and reclamation of wet, low-lying coastal lands were widely undertaken in seaboard regions extending from Hangzhou 杭州 Bay to Guangzhou 廣州. These new coastal fields, named variously in different places either *haitutian* 海塗田, *haitian* 海田, or *chaotian* 潮田, all similarly possessed dikes, ditches equipped with sluices, and water pools.

In general, the provisions for irrigation of these new coastal fields, limited to rainfall and the water remaining in the old fields, were unsatisfactory. The situation was particularly bad at the start of their development. In such regions, however, where every kind of improvement in irrigational construction had been put into effect in newly developed lands since early times, as the irrigation system improved in the highland fields, it also improved in the coastal fields. At the same time, new developments continued at the frontier of those coastal fields.

In the new coastal fields, where irrigational conditions were thus inferior, Zhancheng 占城 varieties of rice were more often cultivated than nonglutinous, late-ripening rice. The Zhancheng varieties have the advantages of being able to tolerate drought and alkaline conditions, as well as being early-ripening. Moreover, in regions south of Fuzhou 福州 at that time, in addition to cultivation of double-crop, wet rice, planters also used both early- and late-ripening Zhancheng varieties of rice. Frequently, these varieties were used in the new coastal fields. Double-crop cultivation

was more effective than single-crop cultivation in transforming the salty soil there. Moreover, the narrow, ten to fifteen *mou* 畝 areas under cultivation were suitable for double-crop cultivation. It became more advantageous than single-crop cultivation.

However, in terms of harvest yield, double-crop cultivation of wet rice in these new coastal fields was inferior to the late-ripening, single-crop rice cultivation in the fields of the interior. It had been chosen in an attempt to avoid the problems of irrigation and poor soil. Consequently, double-crop cultivation of wet rice in the new coastal fields did not attain the height of its productive potential, nor did it attain the standard of Song period techniques of wet rice cultivation.

## KEBEK AND YASAWR

### The Establishment of Rulership in the Chaghatai-khan

KATO Kazuhide

During the first quarter of the fourteenth century, the state of Chaghatai khan commenced on a course to centralize the authority of its inner ruling circles in rebuilding a rulership. This political process is accurately reflected during this period in the struggle between Kebek of the Duwā's family clan, and Yasawr, of another kings' lineage.

In summary, Kebek murdered a member of an affiliated clan, Taliqu, as a "usurper" and, by checking the powerful nomadic aristocracy, persevered in strengthening the governmental authority, tried to act in his own interest in opposition to him. Consequently, Yasawr was forced into exile to Khurāsān and failed in his attempt to seize control of Iran. In 1320, he was defeated by armies despatched by Kebek, who had already become Chaghatai-khan.

While possessing the typical qualities and appearance of a nomadic aristocrat, Yasawr was yet a new kind of nomadic aristocrat who, as a moslem, exhibited a leaning toward Islamic culture. He lost charge of the government because he had no policy for governing a non-nomadic people.

Kebek, on the other hand, appearing to be a follower of an alien religion, attempted to understand Islamic culture and made plans to strengthen